

「アメリカで掴み取りたいもの」

函館工業高等専門学校 1年 奥田舞子

私は現在実家から離れて、函館高専で技術者になるために日々テクノロジーについて勉強している。私が技術者を志すきっかけは私の幼い頃の経験にある。

私の母はフィリピン人で、時々母の実家に行くことがある。幼い頃、母の実家があるフィリピンの首都マニラに行った。マニラは日本のようにお店や高層ビルも沢山建っていて、とてもにぎやかであった。一方、フィリピンの親戚がいるパンパンガというマニラから少し離れたところにはバスの便がとても少なく、電車がなくて移動が大変だった。私は、マニラから少し離れただけなのにこんなに街の雰囲気が変わるのかと驚いていた。正直、不便に感じていた。

日本では欲しいものや必要なものがすぐ手に入るようなコンビニエンスストアやスーパーマーケットが近くにある。ちょっと買い物したいなと思えばそこに行くための交通機関や道路が整備されている。一方、フィリピンのような発展途上国は、首都などの都市部と郊外でこのようにインフラ整備に格差が生じている。私はこの事とてもショックを受けた。

フィリピンは様々な政策が行われ、街もきれいになり、生活環境が改善された。しかし、それは首都や大都市のみで、日本のようにすみずみまでインフラが整っているとはいえない。その結果として、今年起きた地震で多くの犠牲者を出すことになってしまった。

このフィリピンに行った経験から、私はインフラに関することを深く学びたいと思い函館高専に入学した。ある日、ロサンゼルスに行った先輩からロサンゼルスについて話を聞く機会があった。そこでロサンゼルスの街並みや食べ物、建物を撮った写真や動画を見せてもらい、日本とはまた違う景色がみえて何だかわくわくした。海外のインフラはどのようになっているのかをこの目で見てみたいと強く思うようになった。また、写真の中には現地の人々が写っていて、様々な人種が住む街なのだを知り、それぞれの文化や生活スタイルなどの様子も興味を持った。そこでロサンゼルスのことについて自分で調べてみると、ロサンゼルスはヒスパニックやアジア系、黒人系や白人系など本当に色々な人種が住んでいる地域でもあり、彼らはそれぞれの国の文化を尊重しながら生活している。私はこの事を知って、フィリピンのことをまた思い出した。フィリピンにもマレー系をはじめ100から200の民族がいる。ロサンゼルスのようにお互いの文化を尊重して生活しているが、高速道路の未整備や交通渋滞、鉄道が少ないなど不便な部分が多いため、互いに交流する機会が少なく、ロサンゼルスのように交流を深めているというためにはまだまだ改善が必要がある。私はそれぞれの地域の特徴を生かしながらインフラの格差をなくし、よりよいまちづくりをしたいと思う。しかし、何をすべきかと疑問を持った。そこで、これを改善するにはインフラが整っていてかつ、人種の壁を越えてお互いを尊重しながら暮らしているロサンゼルスが良い例だと考えた。だから写真をみるだけでなく、実際にロサンゼルスに訪れ、生活

や文化、街並みを見て、体感してみたいと強く思った。

現地に行き、生活の様子などを聞くことで自分の生活と比べて違いを発見できる。特に、自分と同じ年齢の人たちと話し、価値観の違いや様々な考え方に触れる良い機会となる。それらが、自分の視野を広げ異文化理解の力をつけることに繋がる。そしてそれらは将来、社会に出たときにお互いの文化や考え方を認め合う姿勢が身につき、物事を円滑に進めることに役立つであろう。

様々な民族が住み多様な文化があるロサンゼルスで現地の人たちと共に生活することが、自分が今まで体験していないことに直面するので、自分が住んでいる地域の文化や生活の違いに気づき、今まで触れていた生活や文化の新しい面が発見できる。今の自分を取り巻く環境の見方が変わり、これからのより良い環境を作るのに必要なものを掴めると思う。この思いを持って私は南加道産子会のホームステイプログラムに参加し、南加道産子会の方々や現地の人々の生活、文化に触れて体験する中で新たな発見をして、自分の成長に役立ってたい。

私は将来、フィリピンのようなインフラが未熟な途上国で、その整備事業に関わっていきたい。それには、現地で暮らす様々な人との信頼関係を構築するために、相手の文化を理解する力が必要だ。また、その国や地域独自の景観やまちづくりに対する考え方を引き継いでいくことも必要となってくる。そのためにも、多文化共生都市であるロサンゼルスで様々な経験をし、自分の将来に役立てることのできる能力を身に着けたい。また、それらの経験や能力を自分だけのものにするのではなく、同じ学科の友人やこれからの後輩とも共有しこれからの途上国やひいては北海道のために役立つ経験や知識としていきたい。